

2015年4月20日 2015年第2回ピーストレード講座報告

食用油から東南アジアと日本のつながりを考える

浦野真理子（北星学園大学教員、ほっかいどうピーストレード理事）

「食用油から東南アジアと日本のつながりを考える」というテーマですが、ここでは、パーム油（アブラヤシ油）に限定してお話をしたいと思います。

大きく三つのこと、①パーム油が日本でどのくらい使われているか、なぜ、世界的に使われるようになったのか、②東南アジア地域全般のアブラヤシ生産について、③最大の生産国インドネシアではどのような状況にあるのか、などについてお話しします。

日本でも世界でも増加しているパーム油消費

私たちの食べている食品にはパーム油が多く使われていますが、食品表示されていることはまれで、それを意識することは少ない状況にあります。カルビーのポテトチップスでは、原材料をインターネットで調べたら、パーム油と米油で揚げているとありました。

油脂の種類は、植物油と動物油脂に分けられます。植物油は、パーム油、パーム核油、ココナッツ油、大豆油、ナタネ油などがあります。パーム油はアブラヤシの実を搾ったもの、パーム核油は実の中の種をしぼったものです。ここでは両方を合わせてパーム油とします。動物油脂は、バター、獣脂、魚油、ラードなど。これらの油は、食用以外にも、シャンプーや洗剤、合成樹脂などにも用いられています。

日本では、植物油消費は年々増加していますが、自給率は低くなっています。植物油消費量を1970年と1999年を比較すると約2.5倍になっていますが、国産油がどんどん減少し、輸入油が増大しています。植物油と動物油を合わせても、自給率は13%。国産の植物油は2.2%に過ぎません。国産は価格が高いためもあると思われます。

植物油消費は世界的にも増大しています。経済成長に伴い、油もたくさん消費される傾向にあります。新興国といわれるインドや中国で、人口増加と所得の増加などで、油の消費が増えていることが理由にあげられます。需要増加で、価格が高騰し、生産量が増えているのです。では、どんな油脂が消費されているのでしょうか。アメリカやブラジルが主産地の大豆油は2002年までは世界で一番生産されていましたが、2003年にパーム油に抜かれています。それ以降パーム油が増え続け、世界で一番消費される植物油になっています。ナタネや大豆は1年性の作物なので、収量が安定しませんが、パーム油は生産コストが低く、1ヘクタールの収量が多いので、増えているのです。

パーム油の主要な生産国はインドネシアとマレーシアです。2012年度でインドネシアが2600万トン、マレーシアが1865万トンで、全体の85%を占めています。その他はタイ、コロンビア、ナイジェリア、などです。

主要輸入国は、2012年度で、インド、中国、EUの順です。パキスタン、マレーシア、アメリカ、バングラデシュと続き、日本は10番目です。ちなみに、日本の場合は主にマレーシアから輸入しています。インドネシアとマレーシアはすごく近い国ですから、マレーシアのアブラヤシ農園では、インドネシア人が多く働いています。

日本では植物油と表示してあれば、大豆油やナタネ油の場合もありますが、多くは価格が安く使いやすいパーム油が使われています。パーム油と明示されていないので、わかりにくいのです。私の使っている椿油シャンプーは、椿油の他にパーム油も使われていました。また、パーム油は硬さを調整できるので、口の中でとける新触感のチョコレートなどにも使われています。

東南アジアのアブラヤシ生産地

パーム油はアブラヤシの実を搾油して作られます。アブラヤシの木は4年目くらいから収穫できます。4年目には高さは3メートルくらいで、あまり高くありません。その木に、胡桃くらいの大きさ大の実がいくつもくっつい



アブラヤシの木

アブラヤシの実。収穫後、24時間以内に工場
で搾油する必要がある。



て房状になります。採った実は酸化しやすいので、24時間以内に搾油しなければならず、農園の近くに工場が必要になります。一般の農家が栽培する場合がありますが、その場合、近くに工場が必要で、その工場に買い取ってもらうこととなり、企業に頼ることになります。

東南アジアのアブラヤシ生産地を見てみると、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、ソロモン諸島などです。アブラヤシの生産方式は、大きく分けて、企業が直接生産する場合と、農家が直接生産する場合があります。企業がやったほうが、肥料や技術面などで、収量は農家の2倍くらいになります。アブラヤシ農園は環境などいろいろな問題がありますが、増大してしまったアブラヤシ農園をどうするかを考えると、一つの方法として、農民が直接生産すれば、農民の現金収入が増えるという利点があります。しかし、政府の農家への援助は減っていますので、大企業が主流になっています。

東南アジアでは、どんな企業が開発資本として入っているのでしょうか。民間資本ではマレーシアの企業が出資する場合と国際投資ファンドなど。公的資本では各国政府が国際開発銀行からの融資を元に行う事業がありましたが、80年代以降は、民間資本が増加する傾向にあります。インドネシアの場合は、外国企業の株を60%まで持っています。インドネシアの農園企業の3分の2はシンガポールかマレーシアの投資で行われています。

アブラヤシ農園の拡大に伴う問題

アブラヤシ農園の拡大に伴い、さまざまな問題が起こっています。

地域社会への影響があります。企業生産の場合、住民からの土地収用が必要になります。国有地であっても、住民が使用している場合が多く、住民に相談なく農園に転換され、紛争が起きています。また、住民が使っている慣習地であっても、住民の有力者が勝手に合意し他の住民に相談されないケースも少なくありません。マレーシアの場合、アブラヤシ農地の80%が国有地ですが、住民が使用しているので、紛争に発展するケースが多くあります。

環境に与える影響もあります。農薬の使用による土地や河川の汚染、熱帯泥炭地の火災など。泥炭地では森が切り開かれてしまうと、森林火災が起りやすくなります。また、アブラヤシ農園は単一作物なので森林生態系が消失し、オランウータンやテナグザルなどの希少動物が住みかを奪われています。

労働問題では、インドネシアを含めてアジア太平洋地域でアブラヤシ生産を行う労働者は 300 万人いるといわれ、このうち 3 分の 2 はインドネシア人です。マレーシアにも多くのインドネシアが出稼ぎに行っています。土地がやせていて貧しい地域である西ティモール出身のインドネシア人も国内外に出稼ぎに出ています。低賃金・農薬被害など劣悪な労働環境で働いています。

インドネシアのアブラヤシ農園

ここからは、インドネシアのパーム油生産についてお話ししたいと思います。

インドネシアでは 80 年代から 90 年代にかけて、スマトラ島を中心に生産されてきましたが、最近ではボルネオ島に広がっています。80 年代はジャワ島から外島への移民政策とともに行われた「中核企業—自作農方式」(PIR) が中心でした。これはジャワ島からスマトラ島やボルネオ島に移住するプログラムで、移住した住民が農園をもらってアブラヤシの栽培をするものです。所有形態では、国営のプランテーションは横ばいで、民営のプランテーションが広がっています。

インドネシアのアブラヤシ農園は、80 年代に 26 万ヘクタールでしたが、2000 年以降の広がりが大きく、2005 年は約 550 万ヘクタール、2014 年は 1000 万ヘクタール以上にもなっています。アブラヤシ農園が広がり始めた頃、地方分権政策が行われるようになりました。地方分権化政策は民主化とセットになって一見良さそうだったのですが、地方のレベルで許認可権を握った知事などが企業からの賄賂を受け農園に容易に操業許可が出されることになりました。

ここからは、私のフィールドの話になります。私のよく行っているのはインドネシア側のボルネオ島、東カリマンタン州です。ボルネオ島は北側がマレーシア、南側がインドネシアで、アブラヤシ農園の広がっている地域です。東カリマンタン州はインドネシアでも 2 番目に熱帯雨林の多い所です。(1 番広いのはパプア州です。) ここでは、70 年代から木材伐採を中心にした森林開発が行われ、その木材の多くを日本が輸入していました。私は木材伐採企業と住民の関係に興味があり 1998 年から調査を始めましたが、2000 年頃には木材がなくなり、アブラヤシの企業が入って来ましたので、アブラヤシ企業と住民との関係に研究がシフトしていくことになりました。

インドネシアでの多面的な問題

私がいつも一緒に勉強しているのはボルネオ島の先住民ダヤク人の方々です。東カリマンタン州東クタイ県ブサン郡には村が 6 つあり、人口は 5000 人。その 90% はダヤク人 (クリスチャン) です。自給自足的な暮らしで、広い土地の中でローテーションをして焼畑・移動耕作で米作を行なっています。森を切り拓く→焼き払ってきれいにする→もみの植え付け→草刈り→収穫をします。収穫した後の土地は、よく回復した森になるまで耕作には利用しません。夫婦 2 人世帯で、一年にコメ約 2 千キロの収穫があるそうです。なお、換金作物として 90 年代にココア栽培が行われるようになりました。

1970 年代後半から伐採会社との間に土地問題は起きていましたが、森林が減少して伐採企業が撤退し、2007 年に 26000 ヘクタールのアブラヤシ農園が進出してきました。5 つの村が農園予定地で、4 つの村は土地収用に合意しています。企業の土地の 20% はアブラヤシ農園を造成して現地住民に分譲するという政府の規則があり、県知事や郡長の後押しもあり、「分譲農園地で高収入が得られる」のではと合意したのですが、期待はずれでした。分譲農園地は農園の 20%、5000 ヘクタールあるべきなのに、2015 年現在で 357 ヘクタールにすぎません。収用に合意していない土地があるから狭いのだというのが企業の言い分です。農園から得られる収入も少なく、1 家族 1 か月 17 万ルピアは日本円で 1700 円くらいです。

このような土地問題だけでなく、アブラヤシ農園は多面的な影響が出ています。

まず、水の枯渇、魚の減少があげられます。河川が汚れ、魚が少なくなって、近隣の村の漁で魚の争奪になっています。5 村のうち 1 村は土地の収用に合意しなかったのですが、下流にあったので、水が汚れ、枯渇してしまいました。

ブサン群ではほとんどの農家が貴重な現金収入源としてカカオを栽培していますが、アブラヤシ農園の進出以来、害虫が大発生し、ココアの収穫が減少しています。事実関係は不明ですが、村人はアブラヤシ農園のせいではないかと話しています。

民間プランテーションの広まりに伴い、労働者の数が増えています。2007 年に約 1 万人でしたが、2011 年は約 3

万5千人に増加しています。プサン郡のアブラヤシ農園で働く労働者の75%はジャワ島やスマトラ島、ティモール島といった他の島出身者で、現地の人ではありません。現地の人はある程度土地があるので米作を行い、アブラヤシ農園の朝7時～午後1時までの労働と兼業できないので、あまりやりたがらないのです。宗教や民族の違いなどで、複雑な社会になっています。

普段企業の不満は口外しないように言われているようで、内情を聞く機会はありませんが、あるとき労働者に話を聞く機会がありました。その方によると、企業が島に迎えに行き労働者を連れてくるのですが、交通費が日本円にして2万円くらいかかり、給料から半年くらい差し引かれるシステムになっているとか。その後、お金をためるのには数年かかるので、長期的に滞在するケースや定住するケースが増えています。もともとの住民も土地の合意はしたけれど企業との土地利用や分譲農園について不満があります。住民と労働者はどちらも弱者ですが会社との関係で立場が違います。予測できなかった社会の変化に戸惑う現地住民と、労働者との争いが起きている地域もあり、今後この地域でもそうした問題が生じる可能性もあります。

今後、どうしていったらいいか

今後の課題として、現地では、一つには、農民もアブラヤシ栽培に参加できるようにすることが考えられます。買い上げ価格もいいし、ある程度は貧困削減になるでしょう。それとともに、ゴムやココア栽培など、多角的農業を行うことではないでしょうか。また、アブラヤシ産業の利潤で環境保全や地域社会に役立つ仕組み作りをすすめることではないかと思います。

日本では、私たちはなかなか意識しませんが、パーム油は日本人の生活の一部になっています。海の向こうの、東南アジア地域で環境や社会問題が起きていることを考え、油脂の自給率を高めること、食品表示を明確にするよう提言すること、環境や社会にやさしい商品が増えるようにはたらきかけることなど、考えられるでしょう。

主な Q&A

Q：土地の取用とはどういうことでしょうか？

A：平たく言えば、住民の使っている土地を、アブラヤシ農園として囲い込み、住民には出て行っていただくという内容です。インドネシアでは、アブラヤシ農園は国から35年間使う権利を得るわけですが、住民への事前相談はありませんでした。土地の登記書もありませんし、大きなまとまった法律はありませんが、農園法では、住民が慣習的に使っていることを地方の政府が認めれば、事前に住民に相談する必要があります。

Q：どんな企業が入っていますか？

A：マレーシアはアブラヤシ農園の先進国で、伐採企業が転身したケースもありますが、インドネシアでは100%外資系の企業は認められていません。株の60%で参加するのはいいので、マレーシアやシンガポール資本がインドネシアの企業に出資する形で会社を設立することもあります。昔の伐採企業は大企業でわかりやすかったのですが、今は株の売買が盛んに行われ、知らないうちに会社の持ち主が代わっていき先困ったりするケースもあります。昔に比べると複雑になっています。

Q：アブラヤシの生育について教えてください。

A：アブラヤシは植えて3～4年で収穫が始まり、20年～30年経つと、背が高くなり、収穫しにくくなるので、切り倒し、新しく植えます。80年代に始まった農園では、切り倒す時期に来ていると思います。

Q：出稼ぎ労働者と村の住民では別々の生活体系なのですか？

A：まったく違います。農園は村から10キロくらい離れていることが多く、労働者は農園の中の住宅に住んでいて、交流はほとんどありません。労働者の子どもが現地の学校へスクールバスでやってくるほか、労働者がクリスチアンの場合は現地の教会の礼拝で交流するくらいです。

Q：ボルネオ島の先住民のネットワーク組織はあるか？ マレーシアとのつながりは？

A：ボルネオ島はすごく大きな島で、日本の本州の3倍くらいあります。NGOはあることはありますが、東カリマンタンでは少ないです。西カリマンタンはNGOが比較的盛んな所ですが、西カリマンタンのNGOで働く友人は、「90年代にはオーガナイズした村が300あったのが、村があきらめたり、村が二分して反対派が少数になったりなどいう

いろいろあって、今は10村位になった」と話し、すごく大変みたいでした。先住民のネットワークだけで解決するのは困難なようです。マレーシアとのつながりは、ジャカルタにはありますが、私の知る限り、ボルネオ島にはありません。

Q：日本へのパーム油の主要輸出国は？

A：インドネシア産をマレーシアで加工したものも含めて、日本のパーム油はほとんどがマレーシア産です。

Q：アブラヤシの生産方式で、企業の収量が多いのは、肥料や農薬のためですか？

A：それもあります。苗が違うようです。農民は木から採った種から育てますが、企業の農園はラボで育てた品質の高い苗を使っています。企業に高く買い取ってもらうためには、品質のいいアブラヤシの方がいいので、農民は自分たちもいい苗を植えたがっていますが、技術指導もなく、苗も分けてもらえないのです。

Q：焼き畑農業では回復にはどのくらいの期間がかかりますか？

A：農民は6か所か7か所をローテーションしていますが、借りたりもするので、10年くらいだと思います。住民は森を開拓したら自分たちの土地だという認識です。広い島なので、昔はそれが認められましたが、今は、企業進出で、だんだん狭くなってきています。

Q：日本で国内産の材料を使っている油にはどんなものがあるか？フェアトレードのパーム油はないのですか？

A：生協などに国内産のナタネ油が置いてありましたが、結構高いですね。パーム油をボイコットするとアメリカがもうかるだけです。サステナブルなパーム油の方向に行ってもらいたいです。私が応援したいのは、貧しい人々が収入を上げていくことにあります。

参加者：昔、油はみんな自給していました。今、復活して国産油を作ろうという動きはあちこちにあります。たとえば、全国的にナタネ油を作る動きがあり、北海道では滝川市で作っています。その他、山形の紅花油、小豆島のオリーブ油、九州のゴマ油などもあります。でも、今は自然食品コーナーにまわるくらいの量しかないかもしれません。

Q：ボイコットするとアメリカがもうかるというのはなぜですか？

A：アメリカの大豆油が売れるようになるだけなのではないかと（笑い）。インドネシアでは、パーム油と石炭は環境破壊の問題がありますが、経済全体からみると大変大きい存在です。これだけ広がってしまったアブラヤシ農園をどうするか…。パーム油で、一般の農民の収入が上がり、環境破壊しない方法を考えたいと思っています。

Q：小規模農家はどこに売っているのですか？

A：近くの企業の工場に売ります。買ったたかれたりもしますが、自分たちで収穫した実を売るためある程度の収入になります。それに比べて、農園の労働者の収入は私の聞いた会社では、1日700円か800円位で最低賃金は満たしているということでしたが、ノルマがあり、1日に400果房を収穫しなければならず、ノルマを達成できない場合は1房4円で計算され、700円に満たないこともあるとか。その上、交通費の返済もあり、あまり割のいい仕事ではないと思います。

Q：収穫の作業方法は？

A：棒のようなもので採って、実を道に並べておくと、回収してくれます。女の人がやるのは、農薬散布の仕事なのですが、体への影響が心配されます。

参加者：パーム油はせっけんにも使われています。せっけんメーカーのニュースに、「パーム油の生産地の問題は大丈夫ですかと消費者に質問され、原材料の労働や環境問題も把握して使っていると回答した」と載っていたのを読みました。企業の責任として、原料にも関心をもつことが大切で、このような企業を応援したいと思います。

※ほっかいどうピーストレードでは、2015年度中に、浦野真理子著『食用油から東南アジアと日本のつながりを考える』のブックレットを発行する予定です。